

農門

土門 剛 どもん たけし



【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

農家に目立ったか。この疑問に答えてみたい。

農協扱いの肥料に被害が集中した

稲が高温障害に陥った場合、真っ先に疑うべきは、最近なら「基肥一発肥料」と呼ぶ緩効性肥料を使った場合の肥料切れという現象だ。

基肥一発肥料は、ご多分に漏れず、新潟でもよく使われている。詳しいデータはないが、普及率は5割か6割ぐらい。これだけ増えたのは、基肥一発肥料を使えば、春に基肥を施し、炎天下の夏場に穂肥を施す手間が省けるからだ。

穂肥部分だけが樹脂などでコーティングされていて、一定の積算水温に達すると、その被覆部分の小さな穴から肥料成分を溶出させる。どのタイミングで溶出するかは、気象データなどから積算水温を想定してプログラムのようにしてある。

便利な反面、厄介な問題も多い。最近のように異常気象で高温が頻発すると、溶出のタイミングが早まったりして、肥料切れを起こしてしま

うことがよくある。稲が肥料を求めるとタイミングで肥料が効かないのだ。「一発」とPRしながら追肥を推奨しているのは、その肥料切れに備えるためだ。

残念ながら気象はプログラム通りの展開にはならない。気象庁ですらスーパーコンピュータを駆使しても1週間後の天気予報を外してしまふ。数カ月先の積算水温を予測することは不可能と考えるべきだ。

話を新潟に戻そう。新潟日報が報じた農協に被害が集中した点。基肥一発肥料は、農協に出荷しない農家も使う。なぜ農協に被害が集中したのか。その原因を突き止めるには、農協が扱った基肥一発肥料のことを調べてみる必要がある。

J A全農にいがたは、18年産から水稲用J A県下統一肥料と銘打ったコシヒカリ用「越後のかがやきシリーズ」を販売している。全農にいがたの説明は、「コシヒカリの5割減々、3割減々栽培向け肥料を県下J Aで統一し、スケールメリットを活かして価格の低減を目指します」。「減々」とは、減農薬・減化学肥料のこと。5割とか3割というのは、化成系でなく有機質系の原料を使う度合いを示したものだ。

越後のかがやきシリーズのデビューは18年産から。その年は肥料切れ

2019年産新潟コシヒカリの1等米比率が20・8%——10月31日公表の農産物検査の結果で出てきた数字だ。新潟コシヒカリは10年産で

20・3%の過去最低という不名誉な記録を残しているが、今回はそれに次ぐ。新潟県農林水産部の公式説明は、8月の台風10号がフェーン（熱風）をもたらし、高温障害による被害を受けたということだ。

ちよつと待つて欲しい。フェーンなら新潟県の両隣の富山県や山形県などにも吹いた。新潟に負けず劣らずの高温に見舞われた。それで富山産コシヒカリが、新潟と同じような被害を受けたという話は聞かない。

現に富山産の1等米比率は82・6%だった。ここは新潟だけに特別な事情があったと考えるべきだ。

もうひとつ気になる情報がある。なぜか農協出荷の農家に被害が多かったことだ。これを裏付けるのが、9月20日付け新潟日報の記事。

「猛暑の影響で未熟米が多く、1等米比率が10%未満で推移している地域農協（JA）が少なくない」

「新潟コシ1等米20%」は

県農林水産部による人災だった

というような問題は報告されなかった。それが19年産でなぜ問題が起きたか。原因究明の手がかりとなるのはここだ。

富山は同じ高温でも 平年以上に1等米キープ

そこでシーズン通しての気温をチェックしてみた。便利な資料があった。北陸農政局作成の気象庁アメダス地点(新潟)の気温の推移を示したグラフ。10月31日公表の同15日時点での作況指数の資料に掲載されていたものである。

1シーズンに春と夏に異常高温のピークがあることが分かる。先に触れた8月のフェーンによる異常高温のほかに、5月の田植え直後にも季節外れの高温が続いていた。5月25日には魚沼市の同アメダス地点(守門)で、5月としては観測史上最高の31.5度を記録。同日付け新潟日報は、「(県内)多くの地点で7月中旬から下旬並みの暑さとなり、21地点で今年の最高気温を更新」と伝えていた。

高温による最初の異変が新潟の肥料関係者から伝わってきたのは6月中旬頃だった。

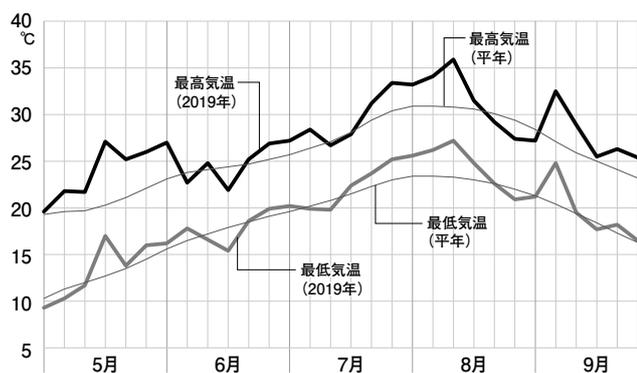
「田植え直後は気温が高く日照にも恵まれた。そのためか稲は過繁茂気味。草の先がグラッと下がっている

のが気になった。根が弱いのかもしれない。とにかく稲姿のバランスはよくなかった」

そこへ8月のフェーンが襲った。14日に上越市で40.3度を観測。翌15日にかけて、35度を超す高温が県内全域を見舞った。品質低下の決定的要因と思われるも仕方がないくらいの異常高温だった。

富山でも2つの高温ピークがあった。ただ田植え直後の気温は、新潟と比較してみると富山の方が高かった。8月はその逆だが新潟との差は約1度。それでも19年産富山コシヒカリの1等米比率は、過去30年の平年値より約1ポイント高かった。品

■アメダス半旬(5日)別気温=新潟



注：平年値は1981～2010年の平均

質が下がることはなかったのだ。

そこで富山で使われている肥料のことを調べてみた。富山の農協が扱っている基肥一発肥料は4種類。「LPS Sシリーズ」と呼ぶ。1号から4号まであって、1号と2号が化成系窒素、3号と4号が有機系窒素を使用。旧知の営農指導員の説明は問題の核心を突いていた。

「農協では化成系を奨めています。有機系は効き方が鈍いから。逆に化成系は効き方が安定している。3号・4号から1号・2号に切り替えるケースも多いです」

越後のかがやきシリーズは、有機質原料を5割(一部は3割)使った減化学肥料だ。どのタイミングで肥料成分が効き出すかを示した肥料効曲線などの資料は公表されていない。県内の生産者にチェックをかけると、JA柏崎営農指導課が18年7月、生産者に配布した「TAC通信57号」のコピーが送られてきた。

テーマは「JA一発肥料は今後どのように窒素が溶け出すのか?」。JA柏崎が扱っていた「JA柏崎ワインタッチ早生」「JA柏崎コシヒカリ肥料」の従来製品と、全農にいがたが投入した越後のかがやきシリーズ「有機50スーパリー肥」を比べていた。結果は次の3点。①初期の速効性窒素は少ない、②有機質は多い、

③穂肥成分量は変わらない。

ポイント①の部分。それが原因で田植え直後の異常高温を乗り切ることができなかったのだ。

「窒素は有機系肥料原料が5割なので初期の肥効は弱かった。そこへ5月の異常高温で、その有機系肥料分が十分に発酵していなかったのか、硫化水素ガスが発生したので根を傷めたようだ。さらに8月のフェーンによる熱風を受けた。これが品質低下の決定要素となったが、田植え直後の肥料が十分に効いていない間に異常高温に見舞われたことが、過去最悪級の品質低下となったと受けとめるべきだ」

新潟県農林水産部は補助金を使ってこの肥料の普及を後押しした。被害が拡散した一因になったのだ。

原因隠して研究会 農林水産部は嘘もつく

コシヒカリの収穫が一段落した10月8日、新潟県農林水産部は急遽、「令和元年産米の品質に関する研究会」の第1回会議を開く。県内の各地から農産物検査でコシヒカリの品質が過去最低になるという情報に備えてのことだ。

とはいえ、もともと本気で原因究明する気持ちは微塵もない。それどころか、県農林水産部はすべての原

辛門

JA新潟県農協
中央会農業地域
対策部長、JA
全農にいがた米

因を異常高温に押しつけようとして
いる。そして火事場泥棒のように、
「新之助」の作付け拡大の口実に使
う。これも県農林水産部の企画プロ
デュースだ。座長役を務めた委員の
新潟大学農学部の高橋能彦教授が研
究会終了直後の記者インタビュー
で、県農林水産部の魂胆を次のよう
に代弁していた。

「基本的な技術を踏まえ、中長期的
な品種の構成が現在のままでいいの
かということも検討したい」（新潟
日報10月17日付け）。

新之助を想定したコメントのよう
である。その新之助は偶然にも1等
米比率99%だった。晩稲品種でたま
たまフェーンが出穂時期などにぶつ
からず幸いしただけのこと。たとえ
高温に適応した品種であっても食味
に劣れば普及は期待できない。

原因隠しのため県民を騙す場と化
した研究会。どんなメンバーか。名
簿をチェックすると以下の7名（技
術に詳しい委員のみフルネーム）。

新潟地方気象台長、森田敏・農研機
構九州沖縄農業研究センター企画部
長、星豊一・JA越後ながおか稲作

穀部長、新潟県主食集荷商業協同組
合（県集連）参事、新潟県農業共済
組合連合会事業部長。
このうち学識レベルで稲作技術や
肥料など農業技術を理解できるの
は、座長の高橋教授と、森田企画部
長、星稲作技術指導統括の3名のみ。
高橋教授の専門は植物栄養学・土壤
学。農研機構の森田企画部長は、水
稲の高温登熟障害のプロ。この3月
まで農水省技術会議研究調整官のポ
ストにいた。星統括は新潟県農業総
合研究所の所長からトラバース。実
質、技術の話は地元事情に通じた高
橋教授と星統括の2名が中心役。
第1回会合で配布された補足資料
からも原因隠しのための研究会とい
うことが裏付けられる。その資料名
は下記の通り。①「水田地温の推移」
（高橋委員提供）、②「窒素吸収量及
び茎葉窒素濃度の推移」（農業総合
研究所提供）、③「台風10号のフェ
ーンについて等」（新潟地方気象台
提供）。

まず③。最初に断わっておくが、

あれれと思ったのは、最初のページ
の5日間の半旬ごとの気温の推移を
示したグラフで、田植え直後の異常
高温がカットされている点。結果と
して気象台は原因隠しにつながる資
料を作らされたことになる。気象台
は何も知らされずに片棒を担がされ

たようなもので何の責任もない。
悪質極まるのが②。稲が窒素成分
をどう吸収しているかを知る資料
だ。稲が窒素を順調に吸っていて肥
培管理に何の問題もなかったと結論
づけている。

悪質と断定したのは、試験研究の
前提条件の記載がないことだ。この
ケースなら、最大の前提条件は施肥
方法。基肥一発方式か、基肥・穂肥
の分施方式か。それによって得られ
る答えは違ってくるはず。どうやら
同研究所の実証圃での試験研究と思
われる。それだとしたらオーソドッ
クスな基肥・穂肥の分施方式。高温
障害は起きにくい。

県農林水産部がいかにデタラメ極
まる組織か、決定版のエピソードを
紹介しておこう。森田企画部長に県
内の稲作事情を説明した際、新潟の
農家は基肥一発肥料を使っても7割
が穂肥を施すと説明していた。ご本
人から聞いた。肥料が原因と思わせ
ないために、すぐバレるような嘘を
ついたようだ。

新之助でミソをつけ 肥料でコミヒカリ自滅

過去最悪級の品質低下をもたらし
た一因とされる越後のがやきシリ
ーズ。商品企画を立てたのは新潟県
農林水産部だった。販売の総元締め

として、全農にいがたが系統肥料メ
ーカーの片倉コープアグリに製造を
依頼、農協の統一銘柄として新潟県
内23農協に納入する計画だった。

県農林水産部の異常なコミットぶ
りは状況証拠から説明できる。新潟
県農業総合研究所に、同シリーズ「有
機50スーパー元肥」の追肥効果につ
いて試験研究をさせていたことだ。
それも16年からの3年間。研究成果
は19年度の「研究成果情報」として
ホームページにアップされている。

県農林水産部は不思議な行政組織
だ。本来、民間企業がやるべきこと
を肩代わりしてやっていることだ。
言うまでもないが、この種の試験研
究は、本来、製造した片倉コープア
グリか、製造を依頼した総発売元で
もある全農にいがたが取り組むべき
ものである。その常識が、県農林水
産部には通じないらしい。

これまた県農林水産部の失敗作、
新之助、デビューして3年目を迎え
たというのに、一向にブレイクしそ
うな気配がない。概算金水準からす
ると低い価格で売られている。その
ためか東京で放映されるテレビCM
でよく目にするのは、北海道産米を
担ぐマツコ・デラックスばかり。

今回の新潟コシ品質低下は、新潟
県農林水産部による人災と断定して
も間違いがない。